

シャールレのお風呂で自由恋愛

「うーん……」

セミナーの自分のデスクで、ユウカは低く唸っていた。ディスプレイに映るスプレッドシート。セルは連邦生徒会の統一書式に従って整然と配置され、関数電卓で検算した計算結果には一分の狂いもない。美しい、と言ってもいい。美しくないのは、その計算結果が示唆する結末だった。早晩、ミレニアムの財政は赤字に転落する。

「あ、ため息をひとつつき、ユウカはタブを切り替える。」

「……シャーレの経理よ」

背後からディスプレイをのぞき込んでくるノアに目もくれず、ユウカは眉間にしわを寄せた。こちらの書式は、ユウカの美意識からは決して美しいとは言えない。何とか体裁だけは整えたものの、カフェの売り上げ、生徒へのプレゼント。連邦生徒会から事件解決の報酬として振り込まれるクレジット。おもちゃの購入費。どれがシャーレとして決済なのか、先生の個人的な取引なのかも判然としない。シャーレが事実上先生一人を中心とした独立機関とはいえ、どんぶり勘定にもほどがある。それを苦勞して、何とか連邦生徒会に提出できる形に整えたユウカの労力ももちろん計算には入っていない。

「そんな顔していると、眉間にシワ残っちゃうわよ」

「余計なお世話よ。何の用？」

そう言いつつ、ユウカはディスプレイから目を離して鼻筋を指の腹でひと揉みすると、ノアが置いたプリントアウトの束に視線を落とした。

「……シャーレ入浴施設改善提案書……？」

「そう」

パラパラとめくりながら、書類の内容を確認する。シャーレのシャワー室が配管の故障で使えなくなった、という話は聞いていた。その書類は、先生だけでなく、シャーレに入浴する生徒が誰彼となくシャワー室を利用している実態と、それに伴う運営コストと風紀上の問題を指摘し、最後に、これを機に現在のシャワー室を閉鎖して「大人の男性」のみが利用する専用浴室の設置を提言して終わっていた。誰が作ったかは知らないが、よくまとまっている。

「シャーレの施設なら連邦生徒会の案件でしょ。ウチに何か関係あるの？」

そう答えながらも、ユウカの脳裏に一つの思い付きが浮かぶ。

「何か案があるんじゃない」

案と呼ぶほどでもない思い付き。シャーレ……いや、先生の持つっているクレジット。それをなんとか還流できれば、ミレニアムの財政も助かるだろう。お風呂が先生専用となればその運営コストをある程度まで負担してもらうことは受益者負担の原則から正当化できる。ただ、それだけでは足りない。

「……それは……」

先生専用のお風呂。ここでは入浴料だけでなく、「一緒にお風呂に入って背中を流してもらう」ことへのサービスクを負担してもらおう。そういうものが存在することをどこで知ったのか。ユウカは覚えていない。あまりにも、荒唐無稽な思い付きのような気がした。けれど、それが実現できれば……。意識しないうちに、ユウカはこくとつばを飲みこんでいた。

「……朝、か」

先生は、休憩室のソファで目を覚ました。かろうじて寝る前に歯だけは磨いたことは覚えているが、昨日着ていた服のまま、顔も洗っていない。

生徒たちが来る前に、シャワーを浴びて髭をそって……着替えはまだ置いてあるから……。目覚め切らない頭を無理やり振ったところで、シャワー室が使えないことを思い出す。

「どうするかな……」

せめて顔だけでも洗わなければ。ソファから身を起したところで、誰かが声をかけた。

「先生？」

「……ユウカ？」

「……またシャワーに泊まったんですね？」

「ああ、うん……はは……」

ブラインドの隙間から差し込む朝日の中、咎めるように腕を組んで立つユウカに、先生はあいまいな笑みを返す。顎を撫でる手の先では、一日分伸びたヒゲがぞりぞりと音を立てる。

「ごめんね、みつともないところ見せちゃって」

緩めたままのネクタイを直しながら、先生は時計に目をやる。まだ始発が動き出したばかりの時間だ。

「どうしてこんな時間に？」

「……昨日、お風呂入ってないですよね？」

「う、うん……」

よれたシャツの袖を鼻先に当てて、先生はすすんと鼻を鳴らす。その様子を見て、ユウカははあ、とため息をつく。

「お風呂、行きますよ」

「……お風呂、完成してたんだね」

ユウカに手を引かれるままついていった先は、タイル張りの浴室だった。

「利用料は先生のクレジットから引き落とされますから、ご心配なく」

「は、しっかりとしてるなあ」

こぼこぼと音を立てて浴槽に落ちるお湯から、降り始めの雨のような心とむくいが漂う。お風呂イスに座った先生は、まだ新しい浴室の内側をぐるりと見回す。化粧タイルの目地は黒ずみ一つなく、真新しい。陶器の浴槽は、大人二人が足を延ばして入れそうなほどに広い。申し訳程度にガラス壁で区切られた部屋の反対側には、ベッドまであった。このまま住めそうな気がする。どれだけ利用料を取られるか分かったものじゃないな、と先生は苦笑する。

「それはそれとして、なんだけど」

「なんですか？」

「…なんでユウカが一緒に…？」

「…そういう、サービスです！」

水着姿のユウカが、先生の後ろから腰をかがめて背中を洗っていた。

「こ、これも入浴料のうちだと思ってください！」

「そ、その…自分で洗えるから…」

「…ダメです」

断固とした物言いに、先生は気圧されるようにただ頷く。それ以上に、体に触れるユウカのすべすべした手が心地よかった。

「…当たってるん…けど」

「…こうしないと、洗えないんです」

水着越しの胸を先生の背中に押し当てながら、ユウカは腕を回す。

「前から洗うのは、さすがに恥ずかしいので」

そういうユウカの顔は、先生からは見えない。けれどその視線は、申し訳程度に先生の膝の間にかかったタオルの下をちらちらと追っていた。

「…顔、見られちゃうし」

「ユウカ、あの…さすがに、そこは…」

ユウカはおずおずと、先生の膝にかかったタオルの下に指をくぐらせる。

「……痛かったら、言ってくださいね」

体を洗っている間、ずっとタオルを下から突き上げていたその場所に指が触れる。熱いものに触れたようにびくとユウカの肩がこわばる。

「…実際に触るの、初めてなんです…」

「…うん」

安心させるように、先生は肩越しにユウカの腕に手を重ねる。

「その、きつと…朝だからこうなつちやつてると思ふんだけど。…私は全然痛くないから、大丈夫」

「…はい」

先生の体を洗い終わって、二人して浴槽で胸まで湯に浸かる。ユウカは顔を背けたまま、背中だけを先生に預けていた。

「ごめんね。なんか、ユウカに氣を使わせちゃったみたいで。でも、さっぱりした」

肌に染み込むような湯の心地よさに、先生は目を細める。

「…私、そんなに臭かったかな…」

「く、臭いというか…男臭いというか…」

しどろもどろと口ごもるユウカのお尻に、先生のモノが当たる。慌てて腰をずらそうとしても、かえって尻の谷間に竿を押し付けるような形になってしまう。

「ん、ごめん」

くすぐったそうに吐息を洩らして、先生は申し訳なさそうな笑みを浮かべる。

「そのうちおさまるから、あんまり…氣にしないでくれると、嬉しいな」

「は、はい…」

タオルで髪をまとめたユウカのうなじに、先生の指が触れる。おくれ毛がほんのりと汗に濡れ、肌は赤く染まっている。

「そろそろ、上がろうか。のぼせちゃいそうだ」

ざぶんと音を立てて、先生が浴槽から腰を上げる。ユウカは初めて、間近に先生のペニスを見た。赤黒くそそり立つ肉の塊の表面で、どくどくと血管が脈打っている。優しい笑顔の下で、先生がずっと秘めていた大人の男の部分。

「…先生」

ユウカは目を伏せ、すぐるように先生の手を引いた。

「もう少しだけ、お時間いいですか」

バスタオルの敷かれたベッドに、二人並んで座る。

「…そろそろ、先生もわかっていると思うんですけど」

「…うん」

否定とも肯定ともつかない、あいまいな相槌。ただ、ユウカの話をちゃんと聞いてくれている、それだけはわかる。
「その…先生と、一緒にお風呂に入っていたら、たまたま…こうなつちやつたというか…」

口にしてみれば、言い訳にもならないような頼りない建前だった。

「ごめんなさい。うまく言えなくて」

「言いたいことは、わかるよ」

先生の腕が、まだ濡れたままのユウカの肩を抱き寄せる。

「お風呂で背中を流してもらっているうちに、たまたま意気投合して、お互いが好きになって：男と女の関係になってしま

う。そういうことだよ」

「：はい」

言いくかかった言葉をさらりと口に出されて、ユウカはうつむく。耳がじんわりと熱い。しかし一方で、心がふつと軽くな

ったようにも感じられた。

「先生って、もしかして：」

「実際に行ったことはないよ。知識として知ってるだけ」

キヴォトスの中で、そういう施設を見たことはなかった。キヴォトスで先生になる前の、どこか遠いところで持っていた知

識：そう思うことにした。

「大人だからね」

「：その割には、手慣れてないですか？」

「ううん」

幾分普段のペースを取り戻したのか、口をとがらせるユウカに、先生は優しく笑う。

「さっきからずっとときどきしてる。隣にユウカがいるから」

「うう、うう：」

低くうなるユウカを、先生が膝の上に抱き寄せる。

「ユウカは、それでいいの？」

「：はい」

「そっか」

静かに、先生はユウカに顔を近づけた。ユウカはがぎゅつと目を閉じると、唇と唇が触れる。重なった唇の間から吐息が漏

れる。顔が離れたとき、ユウカはまだ口を開けたまま、とろりと潤んだ目で先生を見ていた。

「今だけ：好きになってもいいですか？」

「今だけなのが残念だけど」

「んふっ：」

水着の上からやややわと胸とお尻を揉みしだかれ、ユウカはこそばゆさに身をよじらせる。

「あ、あのっ」

「うん」

「重く、ないですか…私？」

無意識のうちに、膝の上で先生にこすりつけるように腰が動いていた。

「ちよっと重いかな」

「…先生？」

「でも、女の子の体って感じがする」

体よくあしらわれたような気がして、ユウカは頬を膨らませる。

「…興奮するよ」

「…うう…」

いきり立ったペニス、ユウカの太腿に触れる。濡れて冷えた肌に触れたそれは、やけどしそうに熱く感じられる。

「お尻も、おっぱいも、太腿も…柔らかくて、あつたかくて気持ちいいよ」

「気持ちいい、ですか…？」

ふわふわともやがかったような脳の中で言葉が勝手に口を突いて出た。

「挟んで、みます…？」

「うん」

おずおずと膝の上で向きを変え、太腿と水着のクロツチが作る三角形の中に、先生のペニスを挟み込む。ぎゅつと挟み込んだ竿が水着越しに陰核に押し当てられ、腰が勝手に動き出す。

「…入る…かな…」

怒張したペニスはユウカの脚に収まりきらず、赤黒く光る亀頭がまるまる顔をのぞかせている。その熱をじかに感じながら、改めてそれが自分の中に入ってくることを意識する。

「ユウカ、初めて…だよね？」

「大丈夫だと…思います…」

とろんと目を潤ませながら、ユウカは口ごもる。

「その、時々…自分でも、してるので…」

「…えっち」

「…先生は、しないんですか？」

「…するよ。自分で処理するしかないからな」

「私のことも、考えたり…しますか」

「うん」

私のこと「を」と言えなかったのは何故だろう。ほんの少しの後悔が胸をよぎる。

「ユウカに言えないこと、いっぱいした。想像の中で」

もじもじと膝をすり合わせ、股座にペニスを押し当てるようにしながら、ユウカは頭をべたんと先生の胸に預ける。

「でも、想像よりずっと興奮する」

たくさんの生徒の一人でしかなくても、今だけは先生と二人でいられる。その心安らぐような満足感を意識するだけで、下腹の奥がじんわりと熱くなる。

「せんせつ、え…」

消え入りそうになる声を振り絞って、ユウカは哀願する。

「入れて、ください」

「うん」

力強い腕が、背後からユウカの脚をがっちり抱え上げる。先生の腕の中では、自分もただの女の子でしかない。押し開かれた脚の間に当たる、ごつごつとした肉塊を感じながら、ユウカは改めて自覚する。

怖いとは思わなかった。抵抗することを許さない、その圧倒的な力に身をゆだねることに、安心さえ感じていた。

「んああっ……」

先生の剛直が、水着のクロツチを押しつけてユウカの秘裂を割る。深く入りすぎないようにユウカの体重を支えながら、先生は有無を言わさぬ力強さで潤んだ柔肉を切り開いていく。

「あんっ…」

怒張の先端が内側から子宮を叩き、ユウカは甘えた声を洩らす。

「おっ…奥…当たっ…んむっ」

肩越しに振り返ろうとしたユウカに、先生が口づける。

「ごめん、ユウカ」

「んあつ、やあつ、んっ…んああっ…!」

先生が、ゆっくりとユウカの腰をゆすり始める。体を内側から貫かれ、かき回される感覚。苦しいはずなのに、喉から漏れるのは甘さを帯びた嬌声だった。

「気持ち良すぎて、あんまり持たないかも」

「…はいっ…」

ぎゅっと目を閉じて、ユウカは背中を先生に預ける。

「私もっ…」

意識しないうちに、ユウカは抱えられたまま自分ので胸と股座をまさぐっていた。乳首を、雛先をつねり上げるたびにきゅつと腹に力がこもり、膣道に迎え入れた怒張を締め上げて、より強く先生の熱を感じる。

「…このままっ、あうっ、んっ、なかつ、中にっ…！」

言い終わる前に、再び口がふさがれる。絡めた舌がびりびりと痺れるように震え、ぎゅつと閉じた瞼の裏でパチパチと火花がはじけた瞬間、先生のペニスがユウカの中で膨れ上がった。

「んっ、んっ、んんっ…！」

互いの舌をむさぼったまま、ユウカの横隔膜がひきつけを起こしたようにひくひくと震え、放たれる精液を最後まで搾り取るように膣肉を蠕動させる。

「はあっ…！」

吐精のすべてをようやく受け止めると、ユウカは酸素を求めて喘いだ。

「気持ちよかった…ですか…？」

「うん」

抱きかかえていた体をしずしずと膝の上に下ろしながら、先生は頷く。

「んんっ…！」

まだ赤黒く充血したままのペニスがコーラルピンクの粘膜と絡まりがなら抜けていき、精液と愛液の泡だった混合物があふれてユウカの尻へと伝う。触れたままの肌から伝わる、ピリピリするようなオーガズムの余韻に、ユウカは背中を丸めて体を震わせる。

「ごめんね」

荒く息をつくユウカの体重を支えながら、先生はユウカの肌を汚してバスタオルに染み込んでいく粘液に目を落とす。

「せつかくお風呂入ったのに」

「…大丈夫。です、けど…」

深く息を吐いて呼吸を整えると、ユウカは指を絡めるようにして、先生の手の手を重ねる。

「もうちょっとだけ、お時間ありますか？」

その日のユウカは、機嫌が良かった。ゲーム開発部から申請された追加予算と、先生から巻き取ってきた先々月の領収書とを前にしても。

「ユウカちゃん？」

「何？」